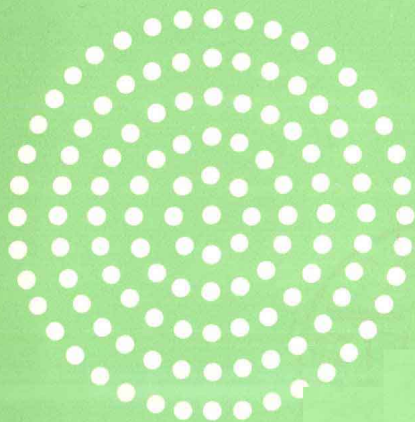


日本の詩集 1

島崎藤村詩集



昭和四十三年七月十日 初版発行
昭和四十九年六月三十日 八版発行

著作者 しま ぎき とう 島崎藤村

発行者 角川源義

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
◎東京一九五二〇八・〇一〇二
電話東京（栄五）セ二二（大代表）

日本の詩集

1

島崎藤村詩集

印刷カラー 暁美術印刷株式会社

本文 文旭印刷株式会社

函・扉 暁美術印刷株式会社

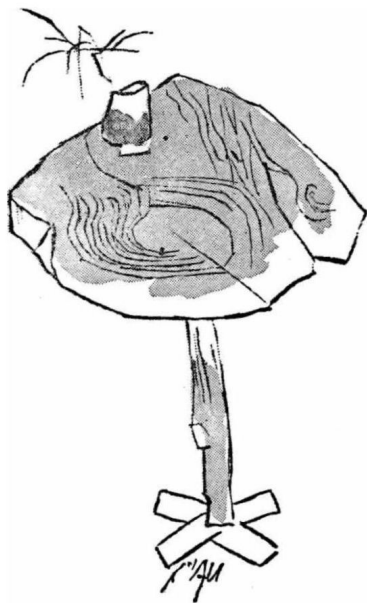
製函 川合紙器加工所

製本 株式会社 宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0392-571901-0946(2)

目次



秋風の歌

雲のゆくへ

逃げ水

月光

別離

望郷

松島瑞巖寺に遊び葡萄栗鼠の

木彫を観て

深林の逍遙

詩集 一葉舟

春やいづこに

鷺の歌

白磁花瓶賦

詩集 夏草

晩春の別離

うぐひす

落梅

一六

一九

二〇

二三

二四

二七

三九

三〇

詩集 落梅集

小諸なる古城のほとり

労働雑詠

其一 朝

其二 昼

其三 暮

壮年の歌

其一 埋木

其二 告別

其三 伴狂

其四 草枕

其五 幻境

其六 邂逅

黄昏

緑蔭

胸より胸に

其一 めぐり逢ふ君やいくたび

其二 あゝさなり君のごとくに

其三 思より思をたどり

其四 吾恋は河辺に生ひて

一三

一七

一四

一七

一八

一三

一四

一五

一七

一九

一八

一五

一五

一六

一九

一九

一九

二〇

二三

其五 吾胸の底のこゝには

二〇三

寂寥

二〇三

其六 君こそは遠音に響く

二〇四

響りん／＼音りん／＼

二〇六

蟹のなげき

二〇五

藪入

二〇三

銀鎖

二〇六

鼠をあはれむ

二〇五

椰子の実

二〇〇

問答の歌

二〇六

舟路

二三三

其一

二〇六

千曲川旅情のうた

二三四

其二

二〇六

常磐樹

二三六

解説

評伝

三好行雄 二〇三

鑑賞

吉田精一 二〇五

詩の旅

大竹新助 二〇七

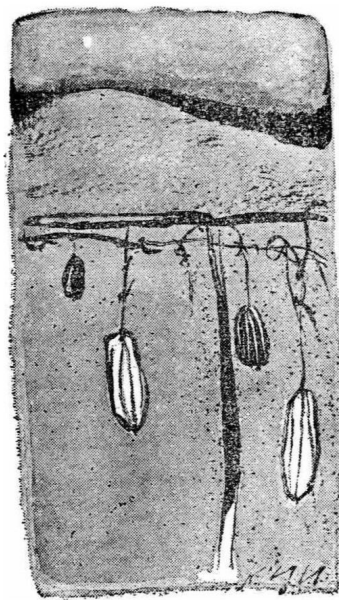
年譜

二〇九

写真協力

坂口嘉朗・柴田勇治・白嶺史朗
前田真三・遊佐隆昭・オリオンプレス

島崎藤村詩集



詩集
若菜集



こゝろなきうたのしらべは
ひとふさのぶだうのごとし
なさけあるてにもつまれて
あたゝかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる
むらさきのそれにあらねど
こゝろあるひとのなさけに
かげにおくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆゑなり
あちはひもいろもあさくて
おほかたはかみてすつべき
うたゝねのゆめのそらごと

おえふ

処女むとめぞ経ぬるおほかたの
われは夢路ゆめぢを越こえてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河やまかはをながむれば

水静しづかなる江戸川の
ながれの岸にうまれいで
岸の桜はなかげの花影に
われは処女むとめとなりけり

都みやこどり鳥浮く大川に
流れてそゞ川添かはそびの
白蘆しらすゐれさく若草に
夢多かりし吾身わがみかな

雲むらさきの九重ここのへの
大宮内おほみやうちにつかへして
清涼殿せいりやうでんの春はるの夜よの
月の光に照らされつ

雲を彫ちりばめ濤なみを刻はり
霞かすみをうかべ日をまねく
玉うその台なの欄干らんかんに
かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の
耀かがやくさまを目にも見て
ときめきたまふさま／＼の
ひとのころもの香かをかげり

きらめき初はじむる暁星あけぼしの
あしたの空に動くこと
あたりの光きゆるまで
さかえの人のさまも見き

天つみそらを渡る日の
影かたぶけるごとくにて
名の夕暮に消えて行く
秀でし人の末路も見き
春しづかなる御園生の
花に隠れて人を哭き
秋のひかりの窓に倚り
夕雲とほき友を恋ふ

ひとりの姉をうしなひて
大宮内の門を出で
けふ江戸川に来て見れば
秋はさみしきながめかな

桜の霜葉黄に落ちて
ゆきてかへらぬ江戸川や
流れゆく水静にて
あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世を経れば
若き命に堪へかねて
岸のほとりの草を藉き
微笑みて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲^{あらやし}の
人の処女^{きとめ}の身に落ちて
花の姿に宿^{やど}かれば
風雨^{ふうし}に渴^{かわ}き雲に饑^うゑ
天翔^{あまかけ}るべき術^{すべ}をのみ
願ふ心のなかれとて
黒髪長き吾身こそ
うまれながらの盲目^{めしひ}なれ

芙蓉^{ふよう}を前^{まへ}の身とすれば
泪^{なみだ}は秋の花の露^{つゆ}
小琴^{せうこ}を前^{まへ}の身とすれば
愁^{うれひ}は細き糸の音
いま前の世は驚^{おどろ}の身の
処女^{せうにょ}にあまる羽翼^{つばさ}かな

あゝあるときは吾心^{わがこころ}

あらゆるものをなげうちて

世はあぢきなき浅茅生^{あさぢうよ}の

茂れる宿と思ひなし

身は術^{すべ}もなき蟋蟀^{こしよ}の

夜の野草^{よも}にはひめぐり

たゞいたづらに音^{おと}をたてゝ

うたをうたふと思ふかな

色にわが身をあたふれば

処女のこゝろ鳥となり

恋に心をあたふれば

鳥の姿は処女にて

処女ながらも空の鳥

猛鷲^{まじゆ}ながら人の身の

天^{あめ}と地^{つち}とに迷ひゐる

身の定めこそ悲しけれ